「産業遺産」保存に力

Frontier 先端を走る

万田坑、三角西港、肥薩線…。熊本の近代化を象徴する、これらの文化財が「産業遺産」として認知されるようになったのは最近のことだ。認知度アップに貢献したのが、2003年発足の「熊本産業遺産研究会」。熊本学園大商学部の幸田亮一教授(59)は、中心メンバーとして活動をリードしてきた。結成から10年。調査・研究を重ね、産業遺産の保存・活用へ模索を続けている。（小林義人）

＝月１回掲載

熊本学園大に移築された旧熊本紡績電気室について説明する幸田亮一教授。1894（明治27）年の建築で、現在は産業資料館として活用されている＝熊本市中央区

結成10年の研究会をリード

熊本学園大商学部教授　幸田亮一さん(59)

■熊本産業遺産研究会が結成から10年を迎えましたね。

きっかけとなったのは、2003年に熊本学園大に移築された旧熊本紡績電気室の保存運動でした。私はもともとヨーロッパの経営史が専門ですが、工場や建物、機械の歴史への興味から産業遺産の保存・活用にもかかわるようになったんです。

保存運動の後、熊本の産業遺産にターゲットを絞って研究しようと、私が研究会の結成を呼び掛けました。会員は会社員など一般の人も含めた30人ほどで、見学会と研究発表会を重ねてきました。最も大きな成果は、09年に出版した「肥薩線の近代化遺産」という本です。さらに今年は熊本の産業遺産100カ所ほどを上下２巻にまとめ、夏から秋にかけて出版する予定です。

■産業遺産を調査したり、保存したりする意義をどう考えていますか。

熊本城のような文化遺産とは違い、産業遺産は明治以降の物がほとんど。つまり私たちの祖父とか曽祖父とか、２～３代前の先祖がかかわっている物です。日本が近代化していく中の苦労や苦心が体現され、記憶が継承されていると言えます。若い世代が見ると、未来へつながる

観光、教育… もっと活用を

新しい発見もあるかもしれません。こうした点が、産業遺産の大きな役割ではないでしょうか。

■活動の手応えを感じていますか。

以前は「産業遺産って何？」という声が多かったのですが、若い人たちを中心に急速に関心が高まったと感じます。企業にも古い工場などを文化財として見直し、積極的に活用する動きが出てきました。

産業遺産は観光資源としても、大きな可能性を秘めています。現役で動いている工場見学と産業遺産の見学を組み合わせた「産業観光」です。さらに、強制労働や公害など近代化の負の側面も含めた歴史遺産として、教育的な役割も持っています。教材として、もっと活用されていいはずです。

■今後の取り組みは？

今、着目しているのはシルク。熊本は西日本の養蚕・製糸工業の拠点でしたから。今は動いていませんが、製糸工場も２カ所残り、機械も現存している。それらを活用して「西の富岡製糸場」という位置付けで、熊本のシルク産業の歴史を振り返ったらどうか。保存や活用に力を入れようと、いろいろと働き掛けています。

県内の産業遺産を紹介する本のゲラをチェックする幸田亮一教授

こうだ・りょういち　1954年生まれ。美里町出身。京都大大学院博士後期課程退学。佐賀大講師、大阪経済大助教授を経て96年から現職。04～05年に学部長。06～11年に大学院研究科長。09年度に熊本市観光振興計画策定委員長。12年から熊本国際コンベンション協会理事。著書に「ドイツ工作機械工業の20世紀」（多賀出版）、共著に「ホスピタリティ入門」（熊日情報文化センター）、「肥薩線の近代化遺産」（弦書房）など。

取材を終えて

毎日のように取材に訪れる熊本地裁には、赤れんがの旧庁舎が資料館として残されている。1908（明治41）年の建築で、熊本を代表する近代化遺産の一つだ。その気品と風格あるたたずまいは、裁判所の威厳や歴史の重みを感じさせると同時に、心に潤いを与えてくれる。70年代の現庁舎建設時に保存運動が起きて取り壊しを免れたそうだが、今では誰もが「残して正解だった」と感じていると思う。遺産は大事に使いたい。